

ソーシャルワーカーの自己生成過程における 専門的自己の構築と解体：中動態から生起 する臨床体験

福田, 俊子 / FUKUDA, Toshiko

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

177

(発行年 / Year)

2017-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第401号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2017-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(人間福祉)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013944>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	福田 俊子
学位の種類	博士（人間福祉）
学位記番号	第 628 号
学位授与の日付	2017 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 中村 律子 副査 教授 末武 康弘 副査 教授 伊藤 正子 副査 東洋大学 教授 稲沢 公一

ソーシャルワーカーの自己生成過程における専門的自己の構築と解体
ー中動態から生起する臨床体験ー

I 本論文の受理および審査の経過

福田俊子氏より、2016 年 5 月 9 日に博士学位請求論文が提出された。同年 5 月 18 日の人間社会研究科教授会において受理審査委員会（委員：布川日佐史、服部環、眞保智子、中村律子）が設置され、同年 5 月 25 日に論文受理審査委員会を開催し、福田俊子氏より提出された学位請求論文が審査に値するものと判断された。この結果が同年 6 月 1 日に開催の人間社会研究科教授会にて承認され、同時に、審査小委員会が設置されて論文の審査が委託された。

その後一部加筆修正があった内容を含め、本審査小委員会は、2016 年 9 月 20 日（火）10:00～12:00 に市ヶ谷実習指導室にて福田俊子氏の博士論文に関わる口頭試問を実施した後に審議を行い、字句の修正を条件に 4 名の審査小委員会委員全員が博士（人間福祉）の学位授与が妥当であると判断した。主査・副査はその後の修正について確認したので、ここに博士論文審査委員会（研究科教授会）に報告する。

II 本論文の主題と方法

「援助」については、通常、「援助する」という他動詞として、「何をするのか、できるのか」あるいは「どのようにするのか」といった「何かをする」主体的行為という観点から語られることが多い。その場合、援助関係についても、「援助する主体」と「援助される客体」といった主客関係として捉えられることになる。

そうした視点から、援助論においては、「援助する者」がキャリアを積んでいく中、どのように変容（成長）していくのかといった問いが立てられてきた。そのため、本論文でも

先行研究としてレビューされているように、精神科ソーシャルワーカー（以下：PSW）の「援助観」が変容する過程（横山 2008）や医療ソーシャルワーカーの「実践能力」が変容する過程（保正 2013）、あるいは PSW の「仕事を構成する三要素」（大谷 2012）などが明らかにされている。

加えて福田氏もまた、学会によってベスト・プラクティスにも選定された先駆的な精神保健福祉活動を展開している A 地域における PSW17 名を対象として、2005 年から行った聞き取り調査（第一次調査）の結果、看護師が「初心者→新人→一人前→中堅→達人」という段階を経て成長するとした Benner モデル（Benner 1984=2005）が PSW の変容（成長）においてもあてはまることを確認している。

本論文では、こうした先行研究や第 1 次調査結果を踏まえながら、これまでの「どのような段階を経て成長していくのか」といった自己生成のプロセスではなく、さらに掘り下げて、「どのような体験が段階を進展させる変容の契機になっているのか」といった問いをリサーチクエスションとしている。すなわち、「どのように変容するのか」ではなく、「なぜ変容するのか」と問いながら、変容の契機となった体験を「節目」と位置付けて、その動的構造を明らかにしようとする研究なのである。

そのため、援助者のキャリア形成過程を時系列的に聞き取るのではなく、現在の本人にとって、いまだに「重要な臨床体験」として心に刻まれている過去の出来事についての聞き取り調査を行っている。2012 年 8 月から 2015 年 3 月に行われた第 2 次調査の協力者は、第 1 次調査に協力していただいた A 地域からの PSW11 名に、必ずしも先駆的とはいええない標準的な B 地域からの PSW5 名を加えた 16 名であり、内訳は、男性 11 名、女性 5 名、臨床経験 20 年以上が 10 名、8～20 年未満が 6 名であった。また、初めての実習において戸惑いを見せた学生への聞き取りも加えて合計 17 名を分析対象としている。

「重要な臨床体験」とは、インタビューガイドによれば、「利用者支援に成果をもたらしたと思う出来事」「失敗した、挫折したと思う出来事」「とても大変な労力を要した出来事」などと例示されているが、こうした出来事に焦点を当てることによって、援助者が何をどのようにしたのかといったことだけでなく、患者さん利用者さんから「言われたこと」や「されたこと」などについても語られることになった。

そのため、「援助する－される」という一方向的な関係ではなく、「者」と「者」との相互的な関係性、いわば「人と人との関係性」を浮き彫りにすることができた。それによって、「重要な臨床体験」の生起する場については、サブタイトルにもあるように、「する－される」の能動－受動の関係性ではなく、そのいずれとも言い難く、能動と受動が反転したり交差したりする「中動態」といった事態として把握されることになった。

また、このように援助する「人」をとらえる概念としては、専門教育についての定評ある研究である Robinson(1948)にならって、「専門職として必要とされる特殊な価値・知識・技術を習得する志向性をもつあるべき自己を意識する自己」＝「専門的自己」(professional self)と「専門職を意識しないあるがままの自己」＝「個人的自己」(personal self)とを採用

し、両者のダイナミズムを理論的な枠組みとしながら、タイトルにあるように「専門的自己の構築と解体」が「節目」となる体験において生じていることを明らかにしている。

なお、これまでの先行研究では、いずれも修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) が用いられているのだが、この手法では、テキスト・データのみが切片化されて概念化が行われるため、事例性が排除されてしまうことになる。しかし、本論文が分析対象とするデータは、協力者の過去における臨床体験に対する現在における意味づけであって、それぞれの個別性が高い。そのため、そうした個別事例性を重視し、また、切片化することなく文脈依存性を尊重するために、事例研究法を分析手法として採用している。

III 本論文の概要

1. 目次構成

- 第1章 「専門的自己」にかかわる先行研究の動向
- 第2章 研究目的、方法
- 第3章 ワーカーを取り巻く臨床における状況の変化
- 第4章 専門的自己の生成過程、及び変容の契機としての「節目」
- 第5章 初学者の実習体験において「ゆさぶられる自己」
 - －「大きな節目」となる臨床体験の構造－
- 第6章 専門的自己の形成
 - －「大きな節目」を契機とした専門的自己の解体と構築－
- 第7章 個人的自己と専門的自己の確立・浸透
 - －「小さな節目」によって再構築される専門的自己－
- 第8章 個人的自己と専門的自己の一体化
 - －自己が自己に呼びかける「小さな節目」となる臨床体験－
- 第9章 「大きな節目」と「小さな節目」をくぐりぬけて生成される自己
- 第10章 考察、今後の課題

2. 各章の要旨

第1章では、ソーシャルワークにおける専門職化の歴史を辿りながら、「医学モデル」から「省察的実践家モデル」へと移行するなかで、スーパービジョンの理論化とともに誕生した「専門的自己」という概念が、「自己活用」の概念へと変化し、ポストモダニズムの影響を受けた今、改めて「自己」の重要性が認識されるようになったことを述べるとともに、看護、教育、社会福祉分野における専門家としての自己生成にかかわる先行研究の概要を整理している。

第2章では、研究目的及び方法、調査概要について述べている。本研究ではナラティブ・アプローチの視座を活用しながら事例研究法を用いることとした理由を説明し、さらに、調査方法、並びに17名の調査協力者の基本属性などを示している。

第3章では、17名の調査協力者のうち、現職のPSWである16名のナラティブ・テキス

トを分析した結果、1990年代を境として、PSW をとり巻く臨床の状況が、大きく変化していることについて記述している。

第4章では、まず、調査で得られたナラティブ・テキストより、現職 PSW の調査協力者16名が「重要」と捉えている臨床体験をエピソードとして抽出し、一人ずつ整理している。その上で、40のエピソードを分析し、ソーシャルワーカーの自己生成には、「大きな節目」及び「小さな節目」という二つの自己変容の契機があることを明らかにして、Benner モデルに示されている技能習得の段階に沿って、二つの「節目」と関連させながら、PSW の生成過程を示している。

第5章では、初心者・新人段階の PSW が「大きな節目」として体験する「行き詰まる」臨床体験の典型例と、初心者の利用者に「ふりまわされる」実習体験を取り上げ、初心者が利用者に「人としてのあり方」を問われ、それに対して初心者が利用者に「人として向き合う」ことで、実習生と利用者という枠を超えた「対等」で「自由度の高い」関係が、両者のあいだで生成されていく過程を詳細に記述している。

第6章では、「専門的自己」を形成する段階である初心者・新人段階において主として生起する「大きな節目」の臨床体験を通して、構築されつつあった「専門的自己」が「行き詰る」「問われる」「ふりまわされる」ことによって、いったんは解体されるものの、その体験が PSW にとっては「転機」や「原点」になることが4名の事例に基づいて記述されている。

第7章では、ある調査協力者の語りを通して、専門的自己が確立される一人前段階以降に主として生起する「小さな節目」の臨床体験が記述されている。それについては、ある調査協力者の語りから、初対面の利用者に「巻き込まれ」「問われる」も、その後活動を共にすることで、長期入院が人の生活能力を奪うことを「教わる」と同時に、意図的な関与から解放される実践への転機として説明されている。

第8章では、多様な臨床体験を積み重ね「小さな節目」と出会いながら、個人的自己と専門的自己が一体化する過程において、「巻き込まれている」ことによって、「専門的自己」に限定されない「人としてのあり方」を「問われ」続けていることが、2名の調査協力者の事例を用いて説明されている。

ある調査協力者は、さまざまな実践に取り組み、「能動的」な実践を展開することで成功を収めていくものの、その成功の積み重ねが主客的な援助関係へと変質する危険性を孕むことに気づいた体験から、「これでよいのか」と自らが自らに問いかけ一問いかけられるという能動的でもあり受動的でもある体験へて、「謙虚であること」という、「能動的でも、受動的でもない」自己であろうとしたことが記述されている。

第9章では、40年以上の臨床経験を有する一人の調査協力者に焦点を当て、「大きな節目」及び「小さな節目」の臨床体験を取り上げて、自己生成の過程においては、「問い」に「開かれた自己」であることの重要性や、それを可能にしているのが、調査協力者たちが創設した職場外の組織であり、「実践共同体」としての機能を有する「自主勉強会」であること

が示されている。

第 10 章では、調査結果を概括しつつ、「節目」となる臨床体験は、「能動」と「受動」が反転したり、交差したりする「中動態」において「巻き込まれている」という事象であり、それは「問い」と「応答」の往還を軸としながら「教わる」という円環構造のなかで展開されると結論付けている。その上で、今後のソーシャルワーク教育のあり方が検討され、最後に、本研究の意義と限界が示されている。

IV 論文の総合的評価

1. 本論文の意義

①研究テーマ

先にもふれたように、「変容の契機」に焦点を当てることによって、どのような段階を経て変容していくのかではなく、どのような出来事を体験することによって変容するのかといったこれまでに見られない新たなリサーチクエスションを設定している。

②理論的枠組み

先行研究が専門職の有する専門性について、その内実を明らかにしようとしていたのに対し、「専門的自己」だけでなく「個人的自己」をも視野に収めることで、援助する「人」の全体像についても理論的に捉える枠組みを提示している。

③調査方法

17名の調査協力者に対し、いずれも2回以上の聞き取りを行い、一人当たりの聞き取り時間は、平均でも4時間を超える。そうした聞き取りによって、「追い詰められる」「行き詰る」といったネガティブな臨床体験についても詳細に聞き出すことができおり、まさに、「専門職としての自己」ではなく、「素の自己」を浮かび上がらせている。

④分析

まず、のべ70時間を超える聞き取りに基づく膨大なテキスト・データを繰り返し読み込み、専門的自己の変容となっているエピソードを40にわたって抽出し、2種類の「大きな節目」と4種類の「小さな節目」に整理している。つづいて、それらのエピソードが各人の Benner モデルにおけるどの段階で発生した体験であるのかといったことまでも特定し、「大きな節目」のすべてが「初心者・新人」の段階で、また、「小さな節目」はほとんどが「一人前」の段階以降に体験されていることを明らかにしている。

⑤考察

専門的自己の解体と構築といった変容は、意図的な能動によって成り立つことでもなければ、一方的な受動によるものでもなく、何とか事態の打開を図ろうとするものの思いがけない展開に、気が付いたら「巻き込まれている」という状態に陥り、そこでは、「問われる」「応答する」が繰り返されながら「教わる」ことにつながっていくといった円環構造の見られることを明らかにしている。

また、「巻き込まれている」という事象においては、能動と受動とが相互に反転を繰り返

すため、どちらとも確定することができない。また、古代ギリシャ語では、主語から出発して「主語の外で完遂する過程」が能動であるのに対して、「主語が過程の内部にある」ことを中動と呼んでいたことから、「巻き込まれている」過程の内部にとどまっている事象を「中動態」として記述している。

⑥総合評価

本論文は、援助場面における「援助する－される」といった主客関係に対して、さらなる根底で支えている「人と人との関係性」をも視野に収めながら、自己生成過程に見られる中動態の力動的円環構造を実証的に明らかにしたものであり、援助関係論における新たな研究領域を開拓したものと評価することができる。ここに拓かれた領域は、専門性が問われる以前の根源的な場でもあるため、ソーシャルワークに限定されることなく、対人援助に携わるあらゆる分野とも議論を重ねていくことができる開かれた領域であるといえることができる。

2. 今後の課題

今後に残された課題として、大きく次の二点をあげることができる。

一点目として、本論文は、17名に対して行われた70時間を超える聞き取りから得られたデータ分析に基づいているが、当然のことながら、17名全員が均等に分析対象とされているわけではなく、また、すべての調査協力者が達人レベルに到達しているわけでもないため、詳細な分析の対象となった事例は限られている。したがって、質的研究法が陥りがちなデータの恣意的な取り扱いといった問題を必ずしも払拭しているとはいえない。

とはいえ、結果的には、現職ソーシャルワーカーに限れば16名中13名(81.3%)から「大きな節目」となる体験が語られ、同じく14名(87.5%)が「小さな節目」体験について語っているという事実から、これらの「節目」が決して特殊な事象というわけではなく、広くみられる臨床体験として位置付けることは可能である。

二点目として、本論文では、援助する「人」を専門的自己と個人的自己とのダイナミズムとして記述しており、そこからたとえば、両者の「浸透」とか「一体化」といった表現が用いられている。とはいえ、もう一步踏み込んで、では、どういう状態であれば両者が「浸透」しているといえるのか、どうなれば両者は「一体化」したと認められるのかといった基準については、必ずしも明確に提示されているとはいえず、口頭試問でも議論された論点の一つであった。

これら二つの論点をめぐる「大きな節目」や「小さな節目」といった概念、あるいは、専門的自己と個人的自己とのダイナミズムによる説明は、いずれも調査開始前から準備されていたものではなく、調査終了後の分析過程で導き出されたものであった。すなわち、探索的に導き出された概念や理論的枠組みであるといえる。もちろん、それによって「新たな知見」を手にすることができたと評価することもできるのは確かであるが、生のデータに戻れば、これらの知見だけでは説明することのできない多くの事象が残されている。これらの概念や枠組みを磨き上げて確定的なものにするためには、得られた知見に基づいて、

量的研究を含めた実証的調査をあらためて行うことが求められる。今後の課題とする。

V 論文審査結果

以上の点と口頭試問の結果を総合的に勘案し、審査小委員会は、本論文の構成と内容が博士（人間福祉）の学位授与にふさわしいものと判断した。

以 上